

模 倣

松 島 暢 志

模倣とは、相手のマネをすることです。有斐閣心理学辞典によれば、「対象（モデル）の行動と観察主体の行動に近似性がある場合に、模倣と見なされる。」とされています。模倣をするためには、他者をモデルとして、その行動を観察し、その行動をコピーする必要があります。「学ぶ」という語は「真似ぶ」から派生したという説もあるように、模倣は社会的学習^{*1}の基本的メカニズムです。例えば、子どもは大人の行動を模倣することで、自力で試行錯誤をして学ぶよりも効率的に新しい行動を獲得することができます。ヒトは模倣ができる数少ない動物の一つで^{*2}、他者のマネをすることで文化を人から人へ伝えてきたとも考えられています。

また、他者の動きや表情などの行動を正確にコピーすることだけでなく、行動の背後にある他者の意図や目的をマネすることも模倣と定義されます。トマセロ (Tomasello, M) は模倣を以下の3つに分類しました。

- ① ミミック (mimic) : モデルの行動の意図や目的とは無関係に、観察主体が単に同じ動作を行うことです。生後まもない新生児が、他者の舌出し行動のマネをする新生児模倣はミミックです。そしてこのミミックは、厳密には模倣ではないとも考えられています。
- ② エミュレーション (emulation) : 観察主体は、モデルの行動の意図や目的をマネしますが、それを達成するための動作が同じかどうかは関係ありません。例えば、重い荷物を持って両手が塞がっているモデルが足でドアを開ける行動を見た場合に、両手が自由に使える観察主体は、「ドアを開けたい」というモデルの目的だけをマネして、足ではドアを開けず

に、最も合理的な方法として手でドアを開けるといふものはこれに含まれます。

- ③ イミテーション (imitation) : 観察主体が、モデルの意図や目的や動作も、すべて同じようにマネすることです。例えば、両手が自由に使えるモデルが足でドアを開ける行動を見た場合に、同じように両手が自由に使える観察主体がモデルの目的だけをマネして手でドアを開けるのではなく、合理的な方法ではないにもかかわらず、自分も足でドアを開けるといふものがこれに含まれます。このイミテーションは「真の模倣」と呼ばれることもあります。

子どもは、14ヶ月頃にはエミュレーション(目的の模倣)ができるようになることが実験によって確かめられています。一方で、目的が一目では分からないような行動であっても、そっくりそのままマネをするイミテーションができるようになるのは、それよりも少し後になる(2歳を過ぎてから)ということも分かっています。

- *1 「和顔愛語49巻」の「社会的学習」を参照。
- *2 日本語で「考えもなく、単にうわべだけをマネすること」を「猿真似」と表現するが、実は猿 (monkey : ニホンザルやリスザル等) は、正しい意味での模倣をしないと考える研究者も少なくない。一方で、チンパンジーやゴリラ、テナガザル等の尻尾のない類人猿 (ape) は模倣をするが、類人猿であってもヒトのようなイミテーションは、人工飼育下以外では行わないとされる。

〈引用・参考文献〉

心理学辞典。有斐閣。1999年